法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

『ヌシャテル書翰』又はシャリエール夫人の醒目

加太, 宏邦 / KABUTO, Hirokuni

(出版者 / Publisher)
金蘭短期大学研究誌
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
金蘭短期大学研究誌
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
15
(発行年 / Year)
1979-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003145

『ヌシャテル書翰』又はシャリエール夫人の醒目

加　太　宏　邦

1

バンジャマン・コンスタンは「アンコンスタン（移り気の）」コンスタンなどと呼ばれ、スタール夫人に心が移るまでの約七年間は主としてシャリエール夫人と付合っていた。コンスタンがこのシャリエール夫人と初めて会ったのは1787年三月のことだから、この時彼はまだ十九歳になったかならないかで、一方シャリエール夫人の方は四十六歳に達していた。彼は『アドルフ』で夫人を、こう描いている。

> 十七歳の時ですが、私は一人の老婦人の死に遭遇したことがあります。以前からこの方の才知は人目に立つ奇妙なものでしたが、これが又、私の精神を成長させてくれはじめたのでした。この婦人は、他の多くの人々と同様、その経歴のはじめは、世間知らずではありましたが、持ち前の大変な精神力と本当に力強い才能の意識があったので、世間に身を投ずることからはじめました。又、他の多くの人々と同様、不自然ではあるが欠くことの出来ない打算的な付き合にうなずくことが出来ず、この方は自分の希望が裏切られ青春が喜こびもなく過ぎ去るのを見たのでした。その内に、老いが彼女を襲いましたが、彼女は抗いつづけました。彼女は私達の領地の隣の城館に不満のまま隠居として住んでいましたが、持ち前の才知だけは達者で、一切のことをその才知でもって分析していました。一年くらいの間の私達の尽きることのない会話の中で私達は人生をあらゆる局面から眺め、結局行き着く所は死のことでした。それからその方と死について大いに語ったあげくに、その死が私の目の前で、彼女を襲うのを見たのです[1)]。

又、1948年になって初めて発見された「幻」の『セシル』にはシュヌヴィエール夫人という名でシャリエール夫人らしい人物が登場していた。

〔…〕私はロザーヌを立ってふるい女友達のシュヌヴィエール夫人に会いに行きました。この婦人は大変な才知の持ち主で、かなり著名な作品をいくつか書いた人でしたが、なにしろ奇妙な人で、すでに老齢でもありました。それでも私はパリ時代には恋愛にほとんど似た感情を抱いたこともあります。この婦人はかなり波乱に満ちた生活と、家族に全く認めてもらえなかった恋愛結婚をしたあと、ほとんど一人でヌシャテル近郊の村に夫と共に住んでいました。夫というのは彼女に大いに敬意は払っていましたが、その冷たさと無頓着な習性は彼女の想像力も心も満してくれるものではありませんでした。婦人は私との年齢のちがいにもかかわらず、自分のそばに私を置いておくことを一度ならず思ったようです。〔…〕彼女の独創的で、果敢で広い才知は私を完全にとりこにしました[2)]。

この二つは彼の小説であり、創作上の人物としてのシャリエール夫人だが、彼は一方で実録とでも言うべきものでも彼女の姿を描いている。そのひとつは『赤いノート』と呼ばれるものである。百十八枚綴のノート（もっとも最後の四枚は白いまま）に記された未完の自伝で、その表紙の色から、今世紀に入って初めて出版された時、そう名づけられた、本来『私の生涯』とのみ記された実録である。この自伝で彼は夫人をこう描いている。

丁度この時です。すぐれた才知を持った、私の知り得る限りでは、第一級の婦人で、かつ私がかつて会ったことのある人々の中で才知については一番豊かな人のひとりという婦人と知り合ったのは。婦人の名前はシャリエール夫人と言いました。この方は、オランダでも第一の名門のひとつの出身のオランダ人女性で、その才知とその性格の奇妙さのためにすでにかなり有名でした。三十歳をすぎて多くの恋愛沙汰――その内のいくつかはかなり不幸なものであったのですが――を経て、彼女は家族の反対をおし切って、自分の弟達の家庭教師と結婚しました。夫なる人物は才知もあり、繊細で高貴な性格の持主でしたが、この上なく冷たく、この上なく粘液質で、それは信じられないくらいでした。〔…〕彼女の才知は私を魅了しました。私達は日に夜に共に語りあかしました。彼女は自分の見るものことごとくに対して実に厳しい判断を下しました。〔…〕シャリエール夫人は人生を眺めるのに実に独創的な、実に生き生きとした方法を持ってしました。又、先入観に対しては大いに軽蔑を持ち、思考においては大変な力強さを持ち、並の人間に対して実に激しい蔑視的な優越感を持っていましたので、この時私は二十歳でしたが、自分が又、やはり奇妙な性格で尊大だったので、そういう気持の時には、彼女の話は私にとって今までに味わったことのない喜こびとなりました。〔…〕私は尽きることのない情熱をもってあらゆる主題について共にお茶を飲み語りあかしたあの日あの夜を感動を持って今なお思い出します。〔…〕会話

はいつでも熱っぽく、激しく、しかしとても奇妙な具合で〔…〕。シャリエール夫人の意見はどれもこれも一切の世間的常識と一切の通例に対する軽蔑に立っていました。〔…〕私達は様々な冗談と人間に対する軽蔑に二人して酔いしれました。〔…〕シャリエール夫人の会話が私を投げ込んだ思想のカオスは、すでにして、自分が耳を傾むけなくてはならないはずだと思い込んでいたものを耐えがたいものに変えてしまったのです。〔…〕たえず人類の愚劣さについて私に語りかけ、奇妙なものや異様なもの、独創的なものすべてに対する私の好みを二人して分ちあい〔…〕[3]。

そして最後に引用したいのが『日記』である。但しこれは1804年一月二十二日から1805年五月七日までしかない。しかし一方で、彼は数字を使って感情や出来事をあらわすという第三者にはわかりにくい『簡略日記』を1804年一月二十二日から平行してつけていて、こちらの方は1807年十二月二十七日まで続いている。この両方の中にシャリエール夫人の名は散見するが、その大方は手紙のやりとりの単なる記録で、コメントめいたものではない。まとまった文章としては次のものくらいである。

（1804年八月十四日）彼女に会わなくなってから七年たつ。彼女と私との一切の関係が断たれてからなら十年になる[4]。

（1805年四月二十日）彼女――あの婦人――は私を大層愛してくれた。一般的に言って、私ほど愛され、私ほど教えられ、私ほど優しくされた者はいない。それでいて私ほど幸福でなかった男もあるまい。

（1805年十二月三十日）シャリエール・ド・テュイル死。私を優しく愛してくれた一人の女友達、必要とあらば求められた避難所、私によって傷つけられ、そのことから絶対ぬけ出せなかった心、そういうものまでも彼女の中に私は失ってしまった。〔…〕何のため人は生きるのだ。

（1805年十二月三十一日）シャリエール夫人の死に心の底から私は悲しい[5]。

2

シャリエール夫人はその旧姓と名前を Isabella-Agneta-Elisabeth van Tuyll van Serooskerken van Zuylen と言い、オランダの男爵家に、1740年十月二十日に生れ、三十歳になってスイス人のシャルル=エマニュエル・シャリエール氏と結婚し、ほんのひと時、パリやジュネーヴに居たが、あとは大

方、スイスのヌシャテル近郊のコロンビエという村でひっそり暮し、すばらしく美くしいフランス語[6] でいくつかの小説を書き残して1805年十二月二十七日六十五歳でこの世を去っている。

先にあげた『アドルフ』、『セシル』、『赤いノート』、『日記』の四つに見られるシャリエール夫人は、完全にコンスタンの内なるシャリエール夫人であり、前二者は、創作上の人物であるため、種々の事実がデフォルメされてはいる。しかしいづれにしても、そういう変型はもっと深い事実をなおのこと描き出すのに役立っているとも考えられる。私達はこの四つに彼女の像のかなり根底的な姿を見てもよいのではないか。ひとつは「老い」あるいは「死」ということがその身辺に常につきまとっている彼女の姿。もうひとつは「奇妙（な）」bizarrerie（bizarre）という語を冠せられた思考を持つ彼女である。もう一度先の四つの作品を見てみよう。「老い」あるいは「死」は次の箇所に見られる。

一人の老婦人の死に遭遇した／結局行き着く所は死のこと／その死が私の目の前で彼女を襲う（『アドルフ』）
すでに老齢でありました（『セシル』）
シャリエール・ド・テュイル死（『日記』）

又、「奇妙（な）」という語は次のように使われている。

この方の才知は人目に立つ奇妙なものでした（『アドルフ』）
なにしろ奇妙な人で／会話は…とても奇妙な具合で（『セシル』）
その性格の奇妙さのために（『赤いノート』）

先の「老い」又は「死」は『赤いノート』にはないが、コンスタンはこの作品で、シャリエール夫人と人生をかなり破滅的に語っている内に、むしょうに死のことを考え、ついには自殺（一種の狂言自殺であるが）をやってしまう経緯を詳しく書いている[7]。コンスタンがシャリエール夫人に初めて会った時、彼女は彼に比べて二十七歳も年上だったとは言え、未だ四十六歳だったのだから、決して老人ではない。にもかかわらず、上に見たように、彼の二つの自伝的創作では、彼女は老婆として描かれている。推定によれば『アドルフ』は

1806年の執筆、『セシル』は1811年の執筆ということになっている[8]。シャリエール夫人が死んだのは1805年十二月二十七日であるがその三日後の日記で、すでにコンスタンは その死を知らされていたことが、わかる。この年の 大晦日は、シャリエール夫人を悼む気持で閉じられたこともこの『日記』は語っている。従ってこの翌年に書かれた『アドルフ』では夫人のイメージを結ぶのにどうしても老婆とか死とかにひきずられた心理状態はわからないではない[9]。が、私達は一方で夫人にまとい付く「奇妙な」思想が、それをさせているということを考えるのも無駄ではあるまいと思う。コンスタンは彼女を描くのにしきりと bizarre と言う。この語は「常軌を逸した」という意味で「奇妙な」としたがもうひとつ「気まぐれな、移り気な」という意味もある。この両義はからみ合せることが不可能ではない。例えばディドロ描くところの『ラモの甥』を想像すれば充分である[10]。もちろん、今ここで彼女がそうだと決めるつもりはない。私達はこれから彼女を最も有名にしたひとつの作品『ヌシャテル書翰』をながめることによってその人となりをもう少し近くによって観察してみたいと思う。

3

『ヌシャテル書翰』[11]は1784年にロザーヌで出版された書翰体の小説である。いつ書かれたかははっきりしない。話の筋は極めて繊細に微妙に進展していくがそれでも単純なのである。ドイツからスイスのヌシャテルに来た青年アンリ・メエル（マイヤー）とその土地の上流階級の娘マリアンヌ・ド・ラ・プリーズ嬢がふとしたことが縁でめぐり合い、恋心を互いに感じるというだけの、この上なく細やかな珠玉の一篇というにふさわしい心理小説であるにすぎない。いわば有閑婦人の上質な遊びくらいにしかすぎず、私達はいくら心理描写が巧みだと言っても、これをもって 何かを論ずるのは あまり食指の 動くことでない。私達の興味をひくのは、実はこの小説に登場する両人の媒介役を果す人物、

すなわちお針娘のジュリアンヌの妊娠にまつわるエピソードの処理のされ方の奇妙さなのである。もうひとつはこのヌシャテルの町の人々に対する観察なのである[12)]。

筋は単純でも、この小説の構成は微妙にして複雑である。まず、この構成について、少し述べることから入ってその「奇妙さ」にたどり着きたいと思う。書翰は全部で約三十通である。約というのは、実際上は、その内で同封されたものが二通あったり、別の手紙が入り込んだり、何人かの人に回覧されたりして、それぞれにかなり手の込んだ構成となっているからである。書き手は五人いる。メエル（発信数十七)、マリアンヌ（同八)、ジュリアンヌ（同三)、メエルの伯父（同一)、メエルの友人マクス（同一）である。一方、受け手の方は七人いて、メエルの友人ゴドフロア（受信数十二)、マリアンヌの女友達ヴィル嬢（同七)、ジュリアンヌの伯母（同三)、メエル（同三)、ジュリアンヌ（同二)、メエルの伯父（同二)、マリアンヌ（同一）である。そして、メエルとマリアンヌの恋の物語りでありながら二人の間の書翰のやりとりは最後の一往復を除いてはない。メエルの主たる文通相手はドイツのハンブルグにいる友人のゴドフロアであり、マリアンヌのそれは一年ほど前にヌシャテルを去った友人のヴィル嬢なのである。当の二人は、だから、ヌシャテルの町で、コンサートだとか舞踏会などで会うという現実の場が別にあり、これらは書翰の形でそれぞれの友人に報告される形をとる。ところでそのお針娘のジュリアンヌであるが、彼女は、この小説の第一番目の書翰の書き手として登場し（このことは彼女とこの手紙のはたす役割の重要さの暗示でもあるが）次のようなエピソードを伯母に報告する。

> ところで伯母様、一昨日私に起ったことをお話ししなくてはなりません。私達はプリーズお嬢様の夜会服をかこんで一日中仕事をしました。早く間に合うようにとそうしていたのでした。そして私の御主人はそれをお届けするように私を使いに出しました。そこで私はヌブールの方へと降りて行ったのですが、大変な人出でした。そしてその時に、とてもやさしそうな身綺麗に装った一人の紳士が歩いていました。私はそ

の夜会服と一緒に，箱をひとつ脇にかかえていました。そしてふりかえった瞬間、それを全部落してしまい、私自身もころんでしまいました。雨が降ったあとなので道がすべりやすくなっていたのです。私は別に怪我をした訳ではありませんがその夜会服が少し汚れてしまいました。お店に又戻る勇気はありませんでした。それで泣いていました。というのはこんな汚れた夜会服をもってお嬢様の家へ行くことはもちろん出来ませんでしたから、御主人のことがとても心配だったのです。あの人は今までも度々怒ったことがあるからです。それに子供達がやって来て、私をからかってばかりいるのです。ところが、運が良かったのです。というのはあの紳士が、ほどけてばらばらになったものを全部ひろうのを助けて下さって私と一緒に御主人のところまでついて行って、私のせいでこうなったのではないと言ってあげよう、とおっしゃったのです[13]。

こうしてお針娘のジュリアンヌは親切な紳士に救われるのである。もちろんこの紳士がメエルであることは言うまでもない。彼女はここで、既にしてマリアンヌの夜会服を落し、一方それを拾うメエルを登場せしめることによって、結果的に二人の仲介者の役割をおわされていることが私達にもわかる。このエピソードは翌日、マリアンヌもジュリアンヌの口から直接聞いて知る[14]。しかし又二人を恋人として結びつけたのは互いの一種の直観的な一目ぼれである。メエルの手紙はコンサートでの出合いをこう語っている。（このコンサートは聴衆としてでなく演奏者として二人共参加しているのである）[15]

僕はこの女性の夜会服を見てこいつは先日、泥だらけの道で〔…〕拾い上げたのと同じだ、と気がついたのだよ。〔…〕僕は彼女が僕の脇に来て歌うということや、彼女の伴奏を僕がするということや、彼女が歩いて来て止まり、楽譜を手にとるということが何か変なことのような気がしたね。僕が本当に何か大変奇異な顔付をして彼女を眺めていたので、あとで人が僕に言うには、彼女が赤くなったのはそのせいではないとはどうも思えないのだよ。現に彼女は目もとまで赤くなったよ。で、彼女は楽譜を落してしまった。ところが僕ときたら、それを拾い上げることに頭がめぐらなかったくらいさ[16]。

一方彼女の方はすでにメエルの名だけはお針娘に聞いて知っていたのだが会ったことはなかった。友人にこう語る。

歌をうたいに行くのでその男の人のそばを通った時に、私は彼をじっと見たのよ。そしたら彼の方も私を見たの。この人が私の夜会服を見知っていることはわかったわ。

私、顔付でわかったの。夜会服を拾ってくれた人らしい顔付きなの。見つめ合って、二人共呆然としていたので、私は楽譜を落してしまったのよ。しかも彼の方もヴァイオリンをひくのを忘れてしまったの。彼も私も一体、何が何だかわからなくて、又何をしたらいいのかもわからなくなっていたのね。彼は赤くなったわ。私も又赤くなったの。ただ私は何が原因なのかわからなかったわ。だって私は別に恥るようなことはなかったのですもの[17]。

一目見た瞬間、まるで電気的衝撃を受けたようにして恋心を感じ、しかもそれとは気づいていない二人をここに私達は見るのだが、事は、そう単純でないことも見る。それは「落る」[18]、「拾う」という二語に象徴される不思議な男女関係に私達は気づくからである。メエルは拾い手である。ひとつはマリアンヌの夜会服の。しかし落した人間はジュリアンヌだった。もうひとつは、マリアンヌの楽譜の拾い主である。落した人は当のマリアンヌである。この二つの場合は、一般的に言っても、確実にこの小説のいわば決定的場面である。しかしこの「落ちる一拾う」に象徴される結びつきが正当だとすると、私達はジュリアンヌのことを考慮に入れなくてはならなくなる。はたして、彼女はあの夜会服の件があってからほどなく、メエルの子供をお腹に宿したことが明らかになるのである。第二十二番目の手紙である[19]。

さて問題はこういういわば椿事にあるのではない。私達はこの小説の構成を見ていく内にこういうエピソードにぶつかっただけなのだ。誰しもこれはエピソード以上のむしろ話の本筋をおびやかす出来事だと思った。ところがこれが実は単なるエピソードになるところにこの小説の「奇妙さ」が存するのである。もちろん小説技法がまずいのではない。何故ならこの小説は先にも述べたように、単純なのであって、いささかも、それを乱した方がよいという理由はないのだから。

ジュリアンヌはこともあろうに自分の妊娠を泣き泣きマリアンヌに告げるのである。しかもマリアンヌはこれを又あるパーティの席でメエルに伝える。これを伝える彼女は「重々しい様子と未だかつて見たことのないある種の威厳を

具えていた」[20]それでメエルの方は「青ざめ」たり「足がふるえたり」[21]するのである。しかしメエルは律義な男で、その事実をむしろ喜こびの気持で聞き、早速生れてくる子供を認知し、生活上も経済上も、子供に迷惑はかけないという決心を彼女に告げるのである。彼女はここから先は極めて事務的で出産までの手だて（メエルとその伯父が見るが）の代行やその他一切のめんどうを私がしましょうと言う。又メエルには随時、ジュリアンヌの近況を伝えることを約束する。そして、彼に以後ジュリアンヌには会う必要がないときっぱり言うのである。それを聞いてメエルは思わず彼女を見る。すると彼女は「ぱっと赤くなった」[22]それで彼は思わず彼女の足もとにひれ伏すのである。すると、「何かお落しになりました？何をお探しですの？」[23]と彼女が聞く。「いいえ。僕はあなたの夜会服に接吻していたのです。あなたは天使です。神様です！」かくて彼は感動のあまり、涙を流す。ここまでのこの場面は一体どう解釈すれば良いのだろう。霊感を与えられたように一目で恋心を抱いた二人の若い男女間で、しかも特に上流階級のお嬢さんの方から卒先してこのようなやりとりが行われるものだろうか。明らかにマリアンヌは「奇妙」なのである。しかもこの小説は、何度も述べたが、あいかわらず「単純な」二人の恋愛の発展の物語りの線上にしかないのである。つまり、このあとしばらくして、この出来事のおかげで恋は進展し、彼は彼女に恋心を告白し彼女もそれに答える、という具合なのである。先に「何かお落しになりました？」という彼女のことばを引用したが、正にここにも「落す」という二人の接近を暗示する語が出てくるのである。ここではもちろん何も落ちていない。しかし彼は物を「拾う」代りに「接吻」を与えるのである。お針娘のジュリアンヌを加えてもう一度この三者の関係を考えてみよう。ジュリアンヌは二人の仲介者（夜会服の件と妊娠の件の両方で）あると同時に一方の当時者（メエルの相手）であり、マリアンヌは同じく当時者（メエルの相手）でありながら、仲介者（妊娠の件で）の役目をはたしているという複雑な人間関係が存在していることが明らかになる。これはメ

エルを頂点とする互助の三角関係とでも名づけられるものであろう。そして、これはまず現実ではあり得ず[24]、その不可能を可能にしたのがマリアンヌの行動なのである。もちろん博愛とか寛大とか様々な理由をつけて彼女の行動を正統化出来るかも知れないが、それではこの小説のこれまでの流れとこの先の流れを著るしくゆがめてしまい、そういうことは恋愛心理小説の枠をないがしろにするものである。むしろ常識的な読者は博愛だとか寛大だとかいう説明に、なおさら彼女の非合理性を浮び上がらせて見てしまう。彼女の行動を「奇妙」だと言ってしまうのは簡単であるが、この「奇妙」さにはもう少し説明がつかないだろうか。そこで私達はこの小説と作者とをもう少し重ねて見ようとする。もし一個の人間としての作者に重ねられるなら、そこで一切の不条理は消滅する。

4

主人公のマリアンヌには作者の投影があるか。「非常に善良なお嬢さん」[25]、「ヌシャテルで一番やさしい女性のひとり」[26]「とても善良なお嬢さん」[27]というのが女主人公について見られる性格の直接描写の全てであるが、これと先の「奇妙」な行動とを結びつける手だてを私達は知らない。一方外形の描写には次のようなのがある。「かなり背の高い、大変やせていて、大変着こなしのよい、それでいて大変簡素な服を着た若い女性」[28]、「あの人の美くしい顔立ち」[29]である。これはシャリエール夫人かも知れない。彼女は若い時から Belle de Zuylen と呼ばれ、それはもちろん Isabelle の愛称から来ているのだが、一方で本当にも美人 belle であり、それゆえ Belle de Zuylen は「ズイレン小町」とも言える名であった。現に彼女が若き日パリで、カンタン・ド・ラトゥールについて画を習った際に師匠は画も教えたろうが、何より弟子をモデルにしたらしく、オランダ美人として通っていた[30]。私達が彫像や肖像画で見る彼女も目鼻立ちが整い確かに美人である。特にウドンの胸像はそうである。し

かしどことなく何か内面の憂愁を感じさせる目だとか口もとをしている。例えばコンスタンの恋人スタール夫人ほど不美人ではないし、又もう一人の恋人レカミエ夫人ほどあざやかにものすごい美人というのでもない。ジュネーヴの図書館にある彼女の肖像はボネと襞襟をつけた横顔だが、真横でなく右目が少し描けるくらい顔をわずか傾けていて、それがメランコリックな印象を与える。又「大変簡素な服を着ている」というのも、いかにもシャリエール夫人を思わす。彼女が内面にのみかかずらわる人だからである。しかしマリアンヌには、まだ別の特徴がある。それはどういう訳か「声が小さい」ということである。「彼女は声が小さくて、部屋の端まではとうてい聞えないだろうことは明らかだ」という指摘をはじめとして小説中に四回も見られる[31]ことから、私達は少し注意をしてもよさそうである。シャリエール夫人がそうだったかどうかを詮索することはいらない。それは明らかに、音量の問題でありながら、実は自分の言うことが他人には聞こえない、あるいは理解されない、ということの象徴だと考えられるからである。マリアンヌはこういうことも言っている。「自分で感じたこと、自分に、あるいは他人に必要なこと、自分の望むこと、自分で考えたことを言おうとすると、誰も聞いてくれないのよ。私は誰の関心も引くことが出来ないのね」[32]、あるいはマリアンヌが友人に「誰もあなたのことなど聞かなくてよ。あなた自身であなたに問いかけることね」と言っている[33]。人と人が通じあうのは共通の基盤があるからで、明らかに彼女はその基盤を欠いているらしい。もちろん彼女の側から見れば他人の一切がその基盤を欠いている。もし他人と結びつけるなら、例えばコンスタンとのそれは「奇妙なつながり」[34]でしかあり得ない。あれほど才知ある彼女がヨーロッパの大都会であったユトレヒトから出て来てスイスの僻村コロンビエにほとんど終生住みついた[35]ことに驚ろきを感じないではない。しかし決して引込み思案とか消極的人間というのではない。彼女には社交や都会は不要だったのだ。それも、彼女の内なる声への志向がそうさせたのかも知れない。そのことはマリアンヌのもう

ひとつの特徴と結びつく。もうひとつの特徴というのは彼女が文通相手（ヴィル嬢）に対して異様な偏愛を抱いていることである。「あなたなくしてはすべては死と同然だわ」[36] とか「もし二人して生活出来るのなら多分幸福になるためにはもう何もいらないわね」[37]とか「あなたは彼〔ヴィル嬢の婚約者〕より私の方を愛してくれるわね」[38] とか「私はメエル自身よりもあなたの方が好きだわ」[39]とかいうのである。もちろんこれは同性愛ではない。彼女はヴィルという友人を内なるものとしてその人間を相手にいわばひとりごとを言っているのだ。いわば内在する自己であり、だからこそヴィル嬢はこの小説で書き手として実際の姿をあらわさないのだ。メエルは恋人であっても他者であるという醒めた意識にこの小説が貫かれていることを知れば、この繊細な心理小説はよりよく理解されるだろう。そして一見瑕疵とも思えるマリアンヌの「奇行」を「奇行」でない姿にしてもう一度私達は読みかえすことが出来る。もちろんヴィル嬢はヌシャテルを去った友達だから、メエルがマリアンヌの内なるものを将来は補完するかも知れないが、本質にかわりはなく、優雅な小説はそこまで書くことを必要としない。上流社会の娘だから、とかいう見方は、まことに不幸なリアリズムの目で、又、その具象に内在する象徴を読みとれない目のために、この作品は当時ヌシャテル中から猛然と攻撃を受けたのである[40]。シャリエール夫人が奇人であってもそれは誰の目にとってそうなのか、ということを考えれば、もうそれ以上は考える必要のないことである。小説は十月に始まり三月に終る形になっていて、舞台は冬のジュラ山脈とヌシャテル湖にはさまれた小さな町である。だから、ここでくりひろげられるひとつの恋愛心理劇はこの小さな冬の密室という閉鎖社会からあふれ出てしまい――それはそのような普遍という必然が小説の内に秘められていたからこそだが――これがたまたまスキャンダルになったと考えてもさしつかえなさそうである[41]。

これは彼女の醒めた、あまりにも醒めたひとりごとであったのだ。一体誰が、ひとのひとりごとに文句を言う権利があるのだ。ただ醒め方はどうなのだ

ろう。コンスタンは二十歳の青年にありがちのいわば情熱的世紀病の先どりをシャリエール夫人とわかち合っていたつもりだったが一方彼女は醒めた中で幻想として彼にそれらしい形を示していたのではないか。と言うのは彼女にはその情熱が欠けていたからである。彼女の結婚までの三十年間の、おそらくかなり人並はずれた内的経歴や、結婚後の不幸の数々のせいと、そして何より持ち前の才知と、田舎の生活と不眠症と阿片中毒[42]はこの世に対して、一種の覚醒の苦しさのあまりの幻影をつくり上げざるを得なくさせ、彼女はその中でさまよいひとりごつ。何かに執着するというような一切の情熱には結びつかず冷たく醒め切った人間観を内につくり上げたのだ。それが彼女にまつわる「老い」あるいは死の舞踏かも知れない。それが彼女の「奇妙」な思考かも知れない。そして何よりそれが『ヌシャテル書簡』そのもののような気がする。

注記

1）B. CONSTANT : *Œuvres.* (Pléiade), 1957. p.15.
2）*Ibid.*, pp. 146—147.
3）*Ibid.*, pp. 101—109.
4）この日シャリエール夫人の女中、アンリエット・モナションが彼を訪ずれた。
5）それぞれ、*Ibid.*, p. 318, p. 473, p.526, p. 526.
6）V. ROSSEL : *Histoire littéraire de la Suisse romande,* 1901. p. 442.
7）*Op. cit.*, pp. 104—105.
8）*Ibid.*, p. 1401, p. 1436.
9）コンスタンの青年時代の厭世観もそれにあずかったろう。 Cf. G. POULET : *Benjamin Constan,* 1968. pp. 27—33.
10）例えばエピグラフの Vertumnis, quotquot sunt, natus iniquis に象徴されるような気まぐれ性のこと。
D. DIDEROT : *Le Neveu de Rameau,* 1963. p. 3, p. 111.
11）*Lettres neuchâteloises,* 1784. 私達は以下の考察で次の版を利用した。
MADAME DE CHARRIÈRE : *Lettres neuchâteloises suivi de Trois Femmes,* 1971. (Bibliothèque romande, Lausanne)
12）私達はこの「ヌシャテルの町の人々に対する」諷刺を考究することはしない。ただ、この小説を理解する上で必要と思われることをいくつか補足しておきたい。ヌシャテルはヌシャテル州の州都であるが、当時プロシアの王領で、スイスに組み込

まれるのは1857年まで待たなくてはならなかった。又、当時スイスで一番大きな町ジュネーヴが人口二万六千人、バーゼル一万五千人、ベルン一万人ほどであった時、ヌシャテルは、おそらく五千人に満たない町だったろう。このためシャリエール夫人のようにユトレヒトとかハーグ、パリ、等を知り、生活をしたことのあるものの目には極めて田舎くさく映ったことは想像に難くない。プロシア王がフランス王よりフランス語の愛好者であったこともあり、この地でのフランス語はまもられたが、これは「正統」フランス語で、一方地元の人の方言はかなりのものがあったらしい。これもシャリエール夫人のように、当時のヨーロッパの貴人の教養の先端をいくものの蔑視をさそったことだろう。メエルがドイツ人でありながら、そして、平民でありながら、上流階級の人々と交われるのはこのあたりに理由があるだろう。又、マリアンヌとメエルが相会する機会が多いのはこのぐらいの規模の町ならではのことであるし、コンサートで聴衆としてでなく演奏者として二人が登場するのもこの町独特の慣行であって、不自然な創作ではない。しかもこの慣行が冬にのみ行われるのも、この小説中の手紙の日付（十月から三月）に完全に一致する。1793年に出版された、「スイス案内」という一種の旅行案内に次のような記事があって、これを裏づけているのを私達は見る。「ヌシャテルは俳優とかを養っておけるほどの人口がない。そこで、社交界の人々で時々劇を上演したりして、これが又、おもしろい。又、コンサートも女性達が歌ったりするし、オーケストラも大部分はアマチュアであるので、これが又、一層興味あるところである。どこか決められた家があって、そこは各自がより合って、舞踏会や芝居や演奏会をするために使われる。ひと冬の費用は大変ささやかであって……」H. O. REICHARD: *Guide de la Suisse*, 1793.

13) *Op. cit.*, pp. 9—10.

14) *Ibid.*, p. 49.

15) *Cf.* 注記12

16) *Op. cit.*, pp. 20—21.

17) *Ibid.*, p. 50.

18) 「落ちる」tomber については p. 58, p. 61 にも別の暗示がある。

19) おそらくは八番目の手紙（Op. cit., p.29）がそれをあらかじめ暗示しているのだろうがかなり微妙である。

20) *Op. cit.*, p. 69

21) *Ibid.*, p. 69, p. 70.

22) *Ibid.*, p. 74.

23) *Ibid.*, p. 74.

24) シャリエール夫人は事実、自分自身この小説を書く直前、三角関係に破れたところ

であり、それがこの小説を書く動機になったとも伝えられる。 Cf. *Postface* de CH. GUYOT in *lettres neuchâteloises,* pp. 242—243、又、B. CONSTANT: Op. cit., p. 101. は相手の男に詳しい。

25) *Op. cit.,* p. 10.

26) *Ibid.,* p. 10.

27) *Ibid.,* p. 23.

28) *Ibid.,* p. 20.

29) *Ibid.,* p. 31.

30) カンタン・ド・ラトゥール描くところの彼女の肖像はやや右をむいて、左七、右三のななめ像である。額は広く、目が大きい。鼻はギリシャ風。特に魅惑的なのは口元である。しかし、私の見たことのある夫人像四つに共通する印象として、彼女の顔立はギリシャ像のように美型ではあるが、可憐さに欠けるということをあげておきたい。したたかというのでもなく冷たいというのでもなく、何か内側にゆらめく不安、あるいは憂愁を力を込めておさえているような顔付きなのである。

31) *Op. cit.,* p.21, p.31, p. 41, p. 45.

32) *Ibid.,* p. 41.

33) *Ibid.,* p. 48

34) V. ROSSEL: *Op. cit.,* p. 436.

35) 注記12で補足したこの田舎町ヌシャテルからさらに七粁ほど湖にそって西南西に進んだところにある僻村で、彼女の館はそこにあった。裏はジュラの山並で、家を背の高いモミの木がとりかこんでいるような、丁度ヴァラン夫人の夏の館をもうひと回りくらい大きくしたような田舎風別荘である。

36) *Op. cit.,* p. 41.

37) *Ibid.,* p. 43.

38) *Ibid.,* p. 48.

39) *Ibid.,* p. 51.

40) ROSSEL: *Op. cit.,* p. 440.
CH. GUYOT: *Op. cit.,* pp. 244—246.

41) ヌシャテル人への直接の諷刺もあるが、これはこの小説の本質をなさないと思う。

42) 不眠症、阿片中毒云々は、私達がコンスタンの『赤いノート』から勝手に推測するのであるが、ほぼ確実であろう。
Cf. B. CONSTANT: *Op. cit.,* p. 104, p. 109.